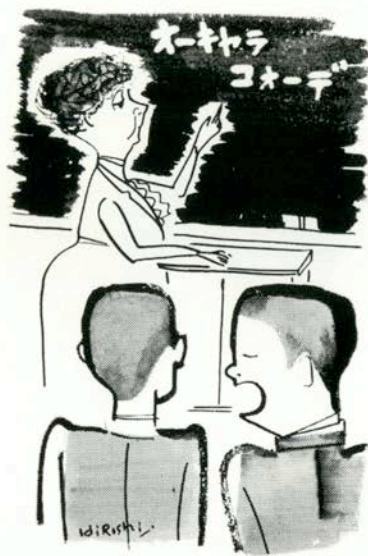


神戸のこと 手当り次第

淀川 長治
え・松 本 宏



三中時代の私の英会話の先生はトリメーンという人であったが、そのあとにマンという先生が入れかわった。そのマン先生の息子さんはいま東京の英字新聞につとめていて私の親友である。トリメーン先生のまえに女の先生が少しばかりおられたが、この人の日本語がけっさくで「大きな声で」と、教室の生徒に呼びかけるとき必ず「オーキャラコード」といわれる。英語のリーディングを全生徒に音読させるとき「ハイ、オーキャラコード」が可笑しくてみんなでキャーッと笑ってしまったものである。

「エバンタイ」という外国美術品店を私の家がやっていたので、よく外人客が見えたが、その一人に「あら、そー」という日本語を「アリヤ、ショー」というきれいな婦人がいた。この人が自動車で

のりつけると「アリヤ、ショーさんが来やりましたでエ」と店員が言う。フランスの御婦人であった。

顔がきくと買いいものもつけになる。ところがアメリカの大きなある会社の重役夫人が景気よく買ってドロンをしたことがあって、その会社だけはつけお断りを願った。ところがこれを怒った同じくその社の夫人が、そのドロンをきめこんだ人は何を買ってどんな年かっこうの人かと聞く。そこで品物はハサック（革の腰かけで丸い大きなザブトンみたいなもの。スツールとも呼んだ）その人は四十二三のこれこれの様子をした奥さんと説明すると、その人は帰米してはいない、この町にいますよ……というわけで、それから一週間目にその本人を引っ張ってきて「さア、あんた、お払いなさいよ」と彼女の腕をこついたのはびっくりした。これはかねてそのハサックの革の色彩と模様をきいて、それをなんとなく婦人仲間の宅でさぐっていたところ、ある夜パーティに招かれたその婦人の家にそれがあったので根ほり葉ほり聞きさぐり、とうとう白状させたそうである。

私は熊内町に住んでいたことがあって、雲中小学校前から市電に乗るのだが、そこを私の若いころはよく馬力（ばりき）車を通ったものである。米俵なんかを山と積んで、馬が鼻を鳴らし汗びっしょりで曳いているが、それでも馬子が「コラッ」と馬の尻に鞭がわりの縄をビシリと当てる。ここへ老西洋婦人がやってきた。彼女はやにわに、ものも言わないで馬力車から俵をひっ掴んで地面へ投げだした。馬子はあつ氣にとられ見とれている。五、六俵も汗をかきながら引きずり落したその西洋婦人とたんに両手をあげてその馬子を殴りにかかった。馬子はそのけんまくに顔をよける。婦人はかなきり声で叫ぶ。すると馬子が「ベクボン、ベクボン、ベクベノケ」と言った。やがて婦人は怒ったことで気がすんだのかさっさと去って行ったが、そのあとで馬子が「異人ババアにや文句も出んわ」とまたその米俵をもとのように積んでいる。そのあいだ汗びっしょりの哀れな馬が小休止できたのがもっけの幸いという事になった。

新開地のキネマ倶楽部ではよく外国人の実演が映画のあいまに小



一時間くらい演じられた。そのころそんなのを演るのはたいがい白系ロシア人でいかにも貧しげであった。夫婦に子供三人ぐらいで、歌ったり踊ったりする素人芸である。その太ったおかみさんがハンガリア・ラブソディの伴奏でリボンのさがったタンボリンを振り叩きながら、せまい舞台上で踊っているのを二階のうしろの特等席から見ている外人婦人が二人「あらまあ、ひどいわねえ」と顔をしかめて囁き合っていた。中学生の私が「ひどいわねえ」の英語がわかったのは可笑しいが、そう、たしかに聞えたのであった。私でさえその舞台のデブさんの踊りは見ていてお気の毒だった。

ある関係で私はそのキネマ倶楽部の試写というものを見せてもらえることになった。「デンティー」という長篇と、もう一つはラリー・シモンの短篇の滑けいでこれをグラグラ笑って見たことを思い出す。その試写はこやがはねてから夜の十一時ごろ、説明者（べんし）が五、六人で明日かわりのその新作を台本の会話とてらしあわせて見るのであるが、これを別の一人が初めから終りまで台本を声を出して読みあげる。その「デンティー」のあとのラリー・シモンの短篇のとき西洋人の七才ぐらいの男の子がチョコチョコと私たちのそばにやってきてケッケツと体じゅうをふるわしてその滑けい短篇を笑いころげて見ていたのだが、その手に小さな生きたぜに亀を持っていて、その亀の甲にナイフで自分の名の頭文字をきざんでいるのが私には面白かった。その青い青いすごく青い目をした金髪の子は、今週までこのこやの舞台で両親と歌と踊りの親子一座の芸を演っていた子供である。その子にべんしの一人が「こら、おまえのおかんケツまわってゆんべ寝とったぞ」とどなりつけていた。この親子は説明者のひかえ室を宿に寝泊りしていたらしい。この日本語を聞いてその子は意味など解りはしなかったろうが、とたんにワツ！と泣き出して「ママァー」と裏の方へ駆けこんでいて姿が見えなくなった。そのとき、私は、なんとなく神戸の西洋人の、さびしい人生を嗅いだようで、私までさびしくなってしまうたのであった。

徳川家康

司馬遼太郎
え・中 西 勝



ちかごろ、徳川家康の再認識ということがよくいわれる。もっとも再認識といっても、べつに高度な意味ではなく、家康の堅実そのものの人生とその成功が、ちかごろの経営者の「ためになる」というだけのことらしい。つまり、戦前の少年雑誌的関心である。読めばためになる、ということとは。

しかし、わるいことではない。家康は確かに教訓の材料になる人であり教訓になる以上にもっと文明論的に研究されていいひとだ。

決して名門のうまれではない。

家康はえらくなつてから、「おれは源氏の嫡流だ」とか、「新田義貞の子孫だ」とかかって家門に箔（はく）をつけたが、そういう家ではない。家康から数代前といえば、三河松平郷のいまいえば村長といった程度の家で、血統もあいまいなものであった。この点
は、のちに「平家の血流である」といつていた織田信長の家系にし

でも似たようなものである。

家康の数代前、北国のほうをうろろろしていた乞食坊主（高野聖であろうか）が、松平郷にやってきた。当時はこういう無銭旅行者がうようよいいて、祈禱などもする。京のはなしや諸国のはなしなどもする。いわば、コミニケーションの役をはたしていた。だから、田舎の豪族や名主などは、よろこんで泊めてやるのである。

その男も、松平郷の松平家に長逗留していたが、やがて当家の後家さんとできてしまつて子がうまれた。こういう坊主が諸国をうろろろするたのしみは、こういうことがあつたからであらう。

その子が、家康の祖である。

この坊主は、よほど好色であつたらしく、隣村の酒井家にもとりこんでその後家どのともできて、子供がうまれた。この子が、のちに徳川家の譜代大名の筆頭になつた酒井家の祖である。

家康はえらくなつてから家門をかざるために「じつはその乞食坊主が新田義貞の子孫であり、従がつてわが家は源氏の名門になる」などというようになった。

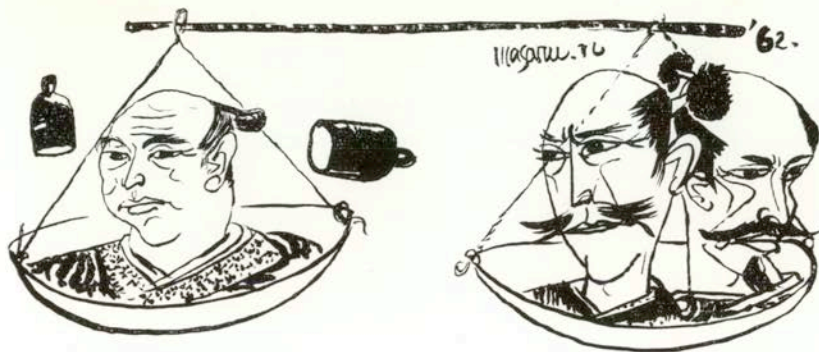
家康の松平家が大きくなつたのは父の代で、近隣の諸豪族を切りなびけて範圍を三河半国にまでひろげたが、家康の幼少のころに家来にころされて死没し、あとは家康一人がのこつた。戦国のことだから、幼主では家がつぶされる。このため隣国駿遠両国の大名今川家に人質にとられ、領地は今川家管理ということでかろうじて温存された。

その後、家来に売られるような形で織田家の人質になったり、さまざまな苦難をなめて成人し、こういう生いたちから来るのか、家康には信長のような坊ちゃん育ちのわがままさがつゆもなかった。

が、これは教訓にはならない。信長の天才的な状態判断や行動は苦勞育ちや貧乏そだちでは持てなかつたものである。信長が家康のような育ちなら、おそらくかれの天才はそだたなかつたであらう。

「若いころの苦勞は薬になる」

というのは、よほどの大才の場合か、たまたま成功した人のいうことで、苦勞というのはほとんどのばあい、人間を小さくするほか



は役立たない。

家康は、信長や秀吉のような天才はもたなかったが、なによりもこの両雄よりすぐれていることはその義理堅さ、律義さであり、家康のこの性格に対する信用が、かれをして天下をとらしめたといっている。

家康は、だまさない人だった。

家康は成人してから自分の領国の三河にかえってたちまちのうちに三河全土を平定したが、このころ、信長とのあいだに、織田・徳川攻守同盟というのを結んだ。

攻守同盟などというものは戦国時代に掃いてすてるほどであったもので、そのほとんどが、いや、そのすべてが長く守られたためしがない。

たった一つの例外は、織田・徳川同盟である。

しかも同盟の片っ方の織田信長という人はたんげいすべからざる外交家で、かれには武田信玄でさえだまされた、徹底的な狡猾外交で、しかもそのだまし方のうまさには天才というよりも神様に近かった。

だから、織田・徳川同盟などは、朝露のように頼りないものであるはずだったが、これが、信長の死までつづいた。つづいたのは、家康が絶対違約しなかったからである。家康は律義そのものの男で何度か信長に煮え湯をのまされたが、それでも裏切らなかった。

「三河どのの律義」

というのは、天下に知られるようになった。どの大名も家康の言葉だけは真（ま）にうけて大丈夫という見方をもった。戦国の世でこれほどの信用のある男はいなかった。

話はずつとのちになるが、秀吉が死んで幼主秀頼がのこり、天下がゆらいだとき、豊臣恩顧の大名でさえ、きゆう然と家康に款（かん）を通じた。

当然なことであった。

「内府（家康）にさえついておれば、わが家を悪くなさることはあるまい」という信用が、むしろ神話的になっていたのである。

徳川家の天下を決定した関ヶ原の戦いはこういう条件のもとに行なわれたもので、家康方で必死に働いたのは、秀吉の子飼いであるはずの福島正則、加藤清正（たまたま肥後に在国中で合戦は近隣の西軍が相手だったが）、浅野長政らであった。かれらは、感傷としては豊臣への恩義を思っているが、現実では数十万石の大大名である。家来も多い。もし政治的に失敗すれば、多数の家来を路頭に迷わさなければならぬ。一片の感傷で自分の処世を決するわけにはいかなかったのである。家の保存の爲には、何よりも安心なのは徳川家康につくことであつた。「内府は悪いようにはなさらぬ」。

家康は、後世「たぬきおやじ」といわれているが、かれは権謀術数のすきな男でもなく、上手な男でもない。おなじ戦国の英雄でも権謀術数の大家は、武田信玄であり、毛利元就であつた。かれらにくらべると、家康などは生涯子供のようなものである。半生、信用に生きた。

だからこそ他人の家来（太閤の遺臣）まであらそつて家康を総帥に押したてたのだ。

家康はそういう男である。

かれが、たぬきおやじになつたのは七十前後からで、当時大阪城には秀頼がいた。すでに二十になろうとしていた。

家康自身は、七十の老人で、老いさき、長かろうはずがないが、秀頼はこれからの年齢である。もし自分が死ねば、せっかく自分になびいている豊臣恩顧の大名はふたたび豊臣家に帰るであらう。家康がせっかく得た天下は、砂上の楼閣になリかねない。

ここで家康は、がらにもないたぬきおやじになつた。まるで死にものぐるいのように秀頼をいじめ、だまし、ついにその家を覆滅した。

家康が律義のカンバンをおろしたのは、そういう事情からであつた。このため後世食えぬ男といわれるようになった。同情されていい人間である。

（作家）



私の好きなスター

石井好子さん

小寺 巖

“ふたりの恋人”——私は音楽会には必ずこの歌をうたうことにしていますと言う石井好子さんにとっては、日本の国とパリとが二人の恋人なのである。その石井さんはシャンソンの本場で歌手としてパリッ子の人気を博したのだから、これこそほんまものというべきだろう。しかし彼女がパリで獲たものは歌手としての人気だけではなかった——もっと彼女に一生つきまとう貴いものを身につけて来ている。

石井さんがここまでになるにはさすがになみなみならぬ苦勞を積み重ねてきている。たびたび大臣を勤めた父を持ち、芸大音楽科出身という恵まれた境遇に育った好子さんには、世間なみの幸せな途をたどる安易な生き方はあったが彼女は環境に甘えず、逃避を求めず、人生の悩みは悩みとして堂々

と取組んで強く生き抜こうとしてきた。

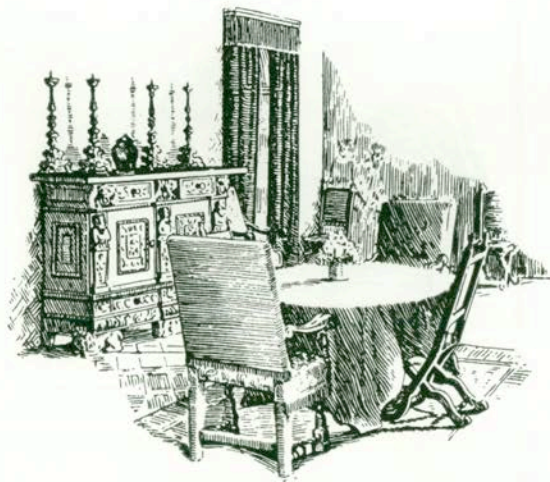
その第一歩がアメリカ留学である——「その頃は食事代をきりつめていたのでもいつも空腹でした。朝食は抜きにして、昼は学生食堂で一番安い十五セントのサンドイッチを食べていたので、横で一ドルもする食事をしている学生が羨しかった……しかしそんな思いも私をみじめな気持ちにはさせず、常に未来を信じてハリ切っていました……」

こんな話を、「アカデミー」の止まり木にかけて聞いていた時の彼女は、全く好感の持てる女性だった。生来屈托のない性格で、気取りやてらいがみじんもない、すべてがアケすだけ。それでいて気持ちは崩れるということもなく、折目はすこぶる正しい。単に面白いというだけで

なく、さすがに勉強もし、いい苦勞を身につけていると思わせるだけの内面的なものを持っている。それでいて、理性、ムキだしの冷たさはなく、いたって温か味の感じられる人間的な魅力の豊かな女性である。

彼女の肢体は美しい。ある雑誌に「日本一の美しい脚の持主」と書かれていたが、そのせいもあってか加州ではミス・テレビジョンの第一位に選ばれたことを知っている人は少いだろう。その時にうたった歌も「ふたりの恋人」だった。彼女はその賞金をふところに、憧れのパリへ旅立つたのである。パリに着いて三日目に、夢にまで見ていたパリの本場で仕事にありつきしかも幸運なデビューに恵まれて勉強を続けたのである。僕は彼女の歌も好きだが、こんな人柄がこの上もなく好きなのだ。(国際会館常務取締役)

家具・室内装飾・工芸品



永田良介商店

大丸前 TEL { ③ 5 5 2 0
③ 1 2 9 0

呉邦陳藏

みよーや

神戸 大丸前
電話神戸③三三八八九番
大阪店 阪神百貨店三階
電話大阪⑥五五四八番
姫路店 やまとやしき百貨店三階
電話姫②一二二一番

おしゃれの秋



輸入ネクタイ
自家特選タイ
卸・小売

秋をシェアしましょう
ネクタイがあなたの服飾の
ポイント。グリーンとイカすのが
沢山そろっています

ネクタイの
元町バザー

神戸×元町 TEL③1401

* For Ladies' Shop

美しいお酒落に
シラサのバッグ



特 選
ハンドバック
専門の店

シラサ

元町2丁目・③0813

野のはな対談

②

すてきなお嬢さん

こんにちわ！

聞く人 岡 部 伊 都 子 (随筆家)
話す人 詫 摩 (たくま) 良

(薬剤士・大阪ガスKK神戸工場診療所勤務)

カトリック信者である詫摩さんは、薬剤士としてお勤めのかたわら、神戸新川にある暁光会の育ての親、パレード神父(仏)のよきアシスタントとして活躍していらっしゃる心のやさしいマリアさまといった感じのお嬢さんです。困っている人達の為、骨身を惜しまず働いてられる詫摩さんに一人でも多くの協力者がふえますように――

岡部 「パレード神父さまとお知り合いになられ、暁光会のお仕事を手伝われるようになって、もうどれほどになりますの？」

詫摩 「足かけ九年にもなりますかしら？」

岡部 「どういうきっかけからお手伝いをなさるようになった――」

詫摩 「私、世の中で恵まれてない人たちのために、働くということが、昔から好きなものですから……。それで、須磨の教会で、パレード神父さまが、新川のスラム街に飛び込まれてお仕事をなさってる――というお話を聞き、直接、神父さまにお会してお手伝いさせて下さいってお願いしたんです。そうしたら、神父さまはニコニコお笑いになりながら「とうてい続かないだろう」

とお思いになったのでしょね、『ともかく、来てごらん』とおっしゃいましてね、葺合区の南本町にあるパレードの一間を借りてらした神父さまのお宅へ伺ったのが最初です」

岡部 「どういう形で、そのお仕事に協力なさってますの。蟻の町のマリアといわれた北原さんのようなお仕事？」

詫摩 「始めの頃は、子供たちが悪の道に走らないようにと、土曜毎に幻灯会を開き、日曜日にはお話や紙芝居そして歌いやすいキャンプ・ソングなどを歌ってその子供たちと仲良くなることに努力しました。またその子たちを通して各家庭の中に入って行く――という仕事を手伝ってました。それに私は薬剤士ですから、ちょっとした傷や病気など私たちの手に応える程度のお手伝いも出来る限りやらせていただきました」

岡部 「本山の女子薬科大学を出られたのですね。」

詫摩 「親和高女から頌栄短大、そして薬専です。」

「追われゆく坑夫たち」に感銘ノ

九州炭坑の人たちにも愛の手を――

岡部 「曙光会のお手伝いの他にも、詫摩さんが中心になられて九州の見捨てられた炭坑の方たちに、支援の物資とか衣類を届けていられるそうですね。」

詫摩 「二年ほど前に岩波新書で上野英信先生の『追われゆく坑夫たち』（一〇〇円）という本が出ましたね……」

岡部 「ええ、私も読みましたわ。あの本は、いま生きている日本人ならば、同じ時代に同じ日本に、こういうふうにして働いたり、若しんだりしている人がいる——ということを知るためにもぜひ読んでほしいと思いましたね。とてもわかりやすい文章だし……」

私は、あれは昭和の女工哀史という感じがするのですが……。大正年間に出された女工哀史が、今でも多くの人を心で激しくゆさぶるようにね、読み始める前の自分と読み終ったの自分というものが、ハッキリとものを見る目が違ってきましたね。そういう秀れたルポですね」

詫摩 「もちろん、お気の毒な方はどこにでもいらっしゃるのですが……。この九州の人たちの働きたいという希望を持ちながら、そして働いていながら生活していかない——という実情に人これはいたいというということなんだらう、そしてその人たちのためにやはり少しでもお役に立ちたいと思ったのです」

それには何が一番いいのだらう——と、思い切って上野先生にお手紙でご相談したのがきっかけです」

岡部 「上野先生を訪ねられたのですね」

詫摩 「ええ、一度炭坑の人たちとお目にかかった方がもっと強い結びつきが出来るのでは——と思い九州へ行く決心をし、上野先生にご案内いただいたわけですね。この時、友人や従妹たちが参加し、女ばかり五人のグループで参りましたが、それはとても人間の住むありさまとは思えないひどい生活でしたわ」

岡部 「土門拳さんの写真集『筑豊の子どもたち』で見たか、見るだけでもこちらは胸寒い光景が多いのに、そういうことを実際に見てこられたその思いはまた違うで

しょうね」

詫摩 「ええ、ですから、単なるヒューマニズムとか、安っぽい同情とかいうものでそういうことを始めたのならそこでやめた方がいいと思ったんです。そこで私は、この人たちがともかく私たちと同じ位に、憲法でうたっているように人間らしい生活が出来るようになるまでは続けなければいけない——とひそかに決心したのです。そしてまず会社の友人や知人などに『みなさんの家庭では不用になった衣類、そういうものを必要としてくれる人たちに差しあげて下さい』と、一、二カ月の間は、もう毎日毎日、同じことを話してはお願いしてまわりました。」

岡部 「いま、おっしゃったように不用品ね、よく台風などで災害が起きるとそこへ向けて人が集めますわね、募金にしてもね。けれどもね、災害が起こらなくても災害があった以上に常時、災害状態にある人がたくさんいるんだということね。今度の石炭調査団の答申を読んでも、またたいへんなことだと思います。非常の事態が平常の状態になっている人たちのためにはね、そういうふうに人間が触れられていくような社会構成を、できるだけなくしていく方向にもっていくかなければならないわねそれと同時に、そうした今、困っている方たちには何かとかしなくてわ。いらない衣類などを協力なざりたい方もたくさんいらっしゃると思うんですよ。もし、この対談をお読みになられた方の中で、詫摩さんたちのなさっていることに、参加したいという方があればどうすれば——。貴女にご連絡すればいいのですか。」

詫摩 「曙光会でそうしたものを集めて大きな箱につめ送り出していますから、曙光会の方へ届けて下さっても、送って下さってもけっこうです。私たちにとって一番うれしいことは、見も知らない方からのお心のこもった応援をいただくことですわ。」

結婚は神さまの御心におまかせしています



写真(左)岡部伊都子さん(右)詫摩良さん

岡部 「詫摩さんは、お色が白くて、お目はパッチリしてらして、いかにもマリアさまみたいな感じなんだけど——ご結婚のことはどのように考えてらっしゃいます？」

詫摩 「うわー！このご質問は悲憤だわ(笑)私、カトリック信者ですから……」

岡部 「神さまとご結婚してらっしゃるわけ？」

詫摩 「簡単にいえばそういうことで……(笑)」

「よき家庭を作って、よき子孫を作る」ということ。それから将来、独身で修道生活する——というこの二つにわけられますけどね。でこの頃のように社会が複雑になりますと、そのどちらでもなくて、やはり神さまのために働く仕事というものが出て来るのです。パレード神父さまもいわれるように「困っている人のために働くこととは、即ち自分に生きる」ということである——というふうに思っています。家庭にはいると、いろいろなことが中途半端になるんではと思うんです」

岡部 「でもね、貴女のような熱情をもって同じようなお仕事なさる方がなきにしてもあらずだと思うんですけど？そういう方いらっしゃいませんか？」

詫摩 「たとえば、暁光会を手伝ってる方でそういう方いらしたけど、神学校にお入りになるなど、各々に神さまが私たちのわからないところでお決めになっている道があると思いますから、それはもうお任せして……」

岡部 「そうですね、しかし、私など、この年になりましてもなかなか悟りきれませんわ。ひよっとしたら、誰れかに愛されるんじゃないかしらとか、好きな方にめぐり逢えばその方に気に入られたい——と思いますしね。なんだか詫摩さんのお話きいていると、こちらの方が子供みたい(笑)」

詫摩 「いいえ、そんなことは——(笑)やはり、なんといえますか、私は神さまを知っているからでは？」

岡部 「そうね、強い信仰がおありだからね。私はなまなましすぎていけないのかしら(笑)」

詫摩 「それに、私自身、しとやかな奥さまとしてじつと家におさまっていそうありませんでしょ(笑)」

岡部 「だって、この頃、なにもおさまっているのが奥さんとは限らないでしょ。名前だけ奥にいらっしゃる奥さんでも外で走りまわっている奥さんもたくさんいらっしゃるわ。それこそ、昔の奥さまをイメージにおかれる必要はないと思うわ。」詫摩さんはとても女性的な魅力にあふれたお嬢さんなのに、「ご結婚をそこまできれいに、自由な気持——『結婚するしないも神さまの心がけ』という感じでね、ただ一生懸命『現在(いま)に生きてられる』といった感じがするんですけど——」

とにかく、大へん地味なお仕事ですが、がんばって下さいね」

※ 暁光会の住所―神戸市葺合区吾妻通五丁目四ノ一



芸術の秋の装い

福 富 芳 美

芸術の秋―例年、十一月は「文化の日」に因んで芸術祭参加と銘うった数々の催しが、各地でさかんに行なわれています。それだけに観劇に、音楽会に、そして文化祭にと装いも新たに仕出かける機会が、いつもの月より多いことでしょう。今回は、そうした場所へいらっしやるにふさわしい装いのエチケツとといったことを参考までにお話してみよう。

まず、これはどのような場合にも欠かせない心づかいですが、ご自分のこれからいっしょやる場所なり、集いの性格（内容）をよく知ることが大切です。それによって当然、着ていかれる服装が違ってくるというもので、ところで、外国の場合、オペラを観に行くとなれば、『オペラにはどんな服装で行く』といったことがすでに習慣づけられています。日本の場合はまだまだそこまでは習慣づけられていません。

例えば、県主催の芸術祭オペラ「蝶々夫人」の観劇などには、厳密には「夜のドレス」でないといけないわけで、それに準じた服装をなさるのが正しいわけですね。

日本で正装して行く観劇といえ、外国のオペラに匹敵できるものは歌舞伎ということになるでしょう。実際歌舞伎座などにいらっしやる時は、みなさんきれいな華やかな着物を召される方が多いようです。洋服でいえ

夜だったらカクテル・ドレスを着て行くのが本当でしょう。でもお昼間のそれはいけません。カクテルやイブニング・ドレスは、あちらでは夜のものと決められているものです。つまり昼間は、キラキラ、ピカピカするものや、胸や腕の出すぎたデザインのものとは避けなくてはなりません。日本の場合、和服のエチケツとは十分心得てらっしゃっても、こうした洋服の場なのエチケツに関しては未完成のようです。もちろん、そうした正装用の装いで出るというチャンスが少ないから無理ありませんが……。

といってそんなに難しく考えなくても、観劇や音楽会などには、スーツ、ツーピース、アンサンブルなどでもいいわけですね。ワンピースのアフタヌーン形式のものだと、アフタヌーンは夜着てもさしつかえありません。デザインや生地を選び方に神経をお使いになればよく、同じスーツやツーピースでも、やわらかい感じに仕立て、豪華さを出したものとか。スーツなら組合わせるブラウスに工夫するなどデザイン、生地ともに「よそいき的な雰囲気をもったものをお召しになれば十分です。また夜の音楽会などにいらっしやる時は、せめて持ちものだけでも花やかなものにしましょう。例えばハンドバック一つをとりあげてみますと、なんでも入るという便利な実用型はさけ、布地で出来たややドレッシーな小型に持ち替える――といった心づかい一つで十分なのです。帽子はかぶらなくてもかまいませんが、手袋はお持ちになること。靴をはき替えるのもいいでしょう。そうした持ちものやアクセサリ的なもので雰囲気を出す工夫をなさってください。

男の方もそうした場合には、キチンとした上下のそろった服装――黒っぽいものとか、濃いグレーなどに、真っ白なワイシャツとネクタイといった服装でいらしてほしいものです。

（神戸ドレスメーカー女学院長・大丸神戸店顧問デザイナー） Ⅱ談

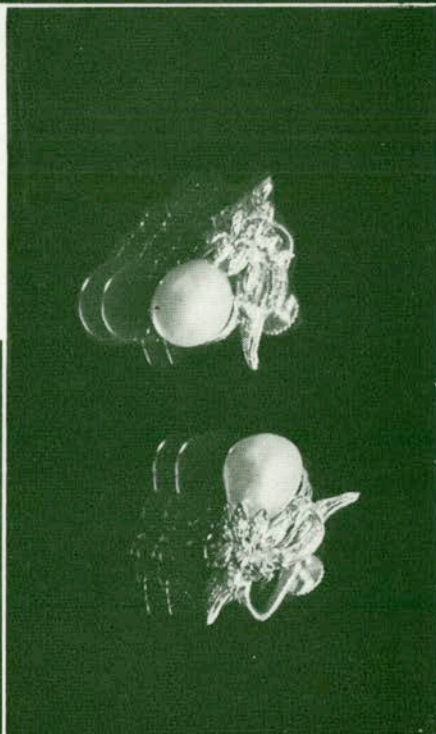


世界の宝石を集め……
輝やく気品をおくる
タジマの宝石

宝石輸入商・宝飾店

タジマ

元町2. TEL ③0387・2552





AUTUMN
&
WINTER
SHOPPING

芸術のアキそして
フユを迎えて
シックなムードと
楽しさを
おくる店
装いに
プレゼントに
ぜひこのお店で
お選び下さい

左より商品写真説明

ニットジャンパー(フナキヤ)
ニットカーデイガン(サカエ)
冬のオーバー地(トーレイ洋
装店) バッグと木彫のフォ
ーク(イクシマヤ) 舶来チロリ
アンハットとスカーフ(エス
ターニュートン) 石膏(末積
製額)



額縁絵画・洋画材料
室内工芸品

末積製額

三宮大丸北 トアロード
③一三〇九・六二三四

創作ハンドバッグ

アクセサリーと工芸品

イクシマヤ

元町一 (3)二四五〇ハ

紳士洋品の店

サカエ

元町二 ③五二二一

秀品店友の会加盟店

お扱いに満ちて

トレイ洋装店

新聞会館1階②二八一八

男子洋品の店

フナキヤ

元町三 (3)三六一七

輸入婦人服地雑貨の店

エスター

ニュートン

トア・ロード③一八一八

真珠を愛する人は
真珠の美しさを持った人
タサキのパールを選ぶ人は
ホントに真珠を愛する人

良い品を良心的な価格で売る
タサキパールの直売店が
銀座に開店しました。
(銀座西六丁目五並木通り)

田崎真珠

(直売店) 神戸・三宮駅前・新聞会館・秀品店

TEL (22) 5646

(本 社) 神戸市葺合区旗塚通り6丁目9 (工 場) 神戸市灘区六甲台町24番地